ピンチ

「学年末テストまであと三週間しかないの信じられないんだけど！」

「助けて」

「判断が早いな、海斗はともかく凪は珍しいけどどうした」

「・・・。ほんとに地理わかんなくて・・・。」

「地理は覚えたら解けるよ、ね・・・？」

凪は気まずそうに海斗から目を逸らす。視線の先には酷いクマの梨沙がいた。

「学年末、テスト・・・？」

「「「ヒイッ・・・」」」

「今、テストまで二週間って言った・・・？」

凪、飛輪、海斗は無言で首を縦にぶんぶんと振った。

「赤点かも・・・。」

梨沙はガラガラの声で呟く。梨沙は最近脚本に行き詰まっているらしいし、寝れてないのか。そういえば、学年末のテストは一発で赤点課題だったなあ、と飛輪は思った。海斗以外はあまり赤点を取らないイメージだったので、今回凪と梨沙が焦っているのは正直面白い。しかし、今回赤点を取られると貴重な春休みの練習が大幅に削られてしまう。勉強会でもするか。そんなことを考えていると、けたたましい音と共に部室の扉が開いた。

「はなっ、話は聞かせてもらいました！」

「私と千景主催で勉強会をしよう！！」

「お花畑って何？ 訳わかんないんだけど」
「こら梨沙！ 真面目にやりなさい！！」
「はい・・・。」
梨沙が今まで見たことがないくらいにしなしなになっている。凪には海斗と飛輪が心なしかにやにやしているように見えた。海斗はともかく普段あまり表情に出ない飛輪もにやにやしているのが面白い。この勉強会が始まって三日目になるが、梨沙が七瀬と千景の尻に敷かれている状況はまだ慣れない。慣れないので面白い。勉強会といっても部活がない日の放課後に皆で勉強するだけだが、それぞれ得意教科がばらけているので、凪たちは得意教科の理解を深められるし、梨沙に対して万全の体制で教えることができる。梨沙は三学期に入ってから授業中も脚本について考えているか寝ているかだったらしく、どの教科も全く理解していない。普段は結構真面目でも演劇のことになると我を忘れたように没頭するから凄いな、と思う。そろそろ一週間前なので部活が停止になる。今の状況で六人全員揃って練習できなくなるのは非常にまずい。死ぬ気で地理を覚えなくては。

「地理九十二点！？ 凪くんすご！」
「まあね」
「髪の毛ふぁさってやるのうざいな」
部室に三人分の笑い声が響く。今回勉強頑張ったから赤点取らなくてよかった～と海斗は思った。かなり成績優秀な飛輪といつも地理以外はそこそこの点数をとっている凪はともかく、ほぼ全ての教科でギリギリセーフかギリギリアウトな点しか取ったことのない海斗が今回は平均以上の点を取ったのだ。いやあ、俺ってばすごい。自画自賛していると、がらがらと扉が開いた。
「梨沙、赤点回避でーす！」
「でーす！」
この一年で培った声量をフルに活かして七瀬が叫ぶ。千景も後に続く。梨沙さんは？ と海斗が口を開く前に千景が言う。

「梨沙さん本人はいいイメージが降ってきたらしくて帰っちゃいました・・・。」

そう言うところが梨沙らしいな、と凪は苦笑した。

「もちろん七瀬と千景も赤点回避したんだよな」

「当たり前！ 田中くん、我々を侮ってはいけないよ」

もう一度部室に笑い声が響く。終業式まで後一週間もない。これでやっと本腰を入れて部活に専念できる。梨沙の台本もすぐに完成するだろう。残り三ヶ月と少し、ここからは死ぬ気で演技の完成度を上げていかなければいけない。正直不安ではある。しかし、一年かけて大幅に成長した役者たちと梨沙の台本と監督、それに俺の演出。やれるだろ。ここでこの演劇部は終わらない、終わらせない。